国文学研究資料館報

第27号

昭和61年9月

一目次一

オランダにおける日本文学研究と翻訳について……フリッツ・フォス……1
共同研究中間報告……4
評議員会議・運営協議員会議等……7
文献資料部事業報告……長谷川　強……9
第10回国際日本文学研究集会……10
研究情報部事業報告……棚町　知彌……11
整理閲覧部事業報告……本田　康雄……11
データベースサービス
準備室の発足について……山中　光一……14
利用者へのお知らせ……15
昭和六十一年度秋季学会開催一覧……16

展望と共同研究

オランダにおける日本文学研究と翻訳について

フリッツ・フォス

およそ四世紀にわたって存在してきた、オランダにおける日本への関心を、一文に収めるのは至難の業と言えよう。まず、どうしても、数多くの著作名を割愛しなければならない。また、いたずらに煩わしいオランダ語のカタカナ表記を人名だけに限定した。本文中の書名はリストにして、最後の頁に記載する。

日本についての最初の本、フランソワ・カロンの『日本大王国誌』は一六四六年にアムステルダムで出版された。著者は一六一九年に見習いコックとして、すでに十年前から開設されていた平戸のオランダ商館に赴任してきた。生来の語才と勤勉さで日本語を学び、三九年にはカピタン（商館長）に昇進した。商館が日本退去を迫られる危機に瀕した時に、カロンの巧みな日本語と外交的手腕で危機を乗り越え、オランダは鎖国日本との通商特権を獲得した。出島の歴代商館長や医師の中には、カロン以外に、ヨーロッパで日本紹介に大きな役割を果した者は少くない。しかし、それらの著書のほとんどは日本文学に言及していない。その理由は明白である。幕府はオランダ人が日本語の読解力を得るほど長期にわたって滞日することを、好まなかったからである。例外として二人の商館長がいる。千七百八十年代のI・ティチングは日本人通詞の助力を得て、林春斎の『日本王代一覧』を飜訳した。のちにJ・クラップロートが校訂して、パリとロンドンで出版した。一七九九年に来日したヘンドリック・ドゥーフは、『ヅーフハルマ（道訳ハルマ）』を編纂している。彼はナポレオン支配下のオランダに帰れずに、滞日生活を余儀なくされた。一八五三年から五七年までの日本開国動乱期に滞日した、J・H・ドンケルクルティウスは、『日本文法稿本』を著している。

ここに挙げた書物は、日本文学と直接関係はないが、オランダ人の日本語の知識の程度を、推測する手引きになるであろう。

文学の研究

P・F・フォン・シーボルトの大著、『日本』の編纂に多大の貢献をしたJ・J・ホフマンは、フォン・シーボルトから日本語の手ほどきを受けた。またフォン・シーボルトに勧誘されて来蘭し、当時大学町ライデン市に在住していた郭成章から、中国語を学んだ。『日本』の漢字を書いたのはこの中国人である。一八五五年に、ホフマンは国立ライデン大学の初代中国語・日本語教授に任命された。ヨーロッパで最初の日本語講座だった。彼の死の年一八七八年に出版された、『日本語研究』（題名はドイツ語、書名リスト参照）は多数の和歌を、原語と飜訳と文法的解釈付で紹介している。それから『増補絵本宝鑑』の十断片の原語と飜訳文を載せている。ホフマンの後任教授、M・W・デ・フィッセル（一八七五―一九三〇）の業績は主として日本の宗教と美術の分野においてであり、日本文学に関する研究は見当たらない。また私の師であり、前任者のJ・ラーデルも言語学者であったので、同様なことが言える。

一九二九年に、J・L・ピールソン（一八九三―一九七九）は万葉集第一巻の英訳で、ライデン大学で博士号を授与した。三十年か

ら三三年まで、ユトレヒト大学の日本語特命教授であったこともあるが、生涯の大半をライフワーク、万葉集英訳に注いだ。六三年までに全二十巻の飜訳と校訂を完成した。ピールソンの研究には、文学よりも言語学的な色が濃い。飜訳の美しさのみを求めたとしたら、期待が外れるかもしれない。同様なことが私自身の『伊勢物語についての研究』（一九五七）の飜訳でも言えるかもしれない。伝定家筆本の英訳と注釈の五百頁からなる二巻は、伊勢物語の諸本についてや、その後の日本文学に与えた影響、中国からの影響について、それぞれ章を設けた学位論文である。

日本古典文学を主題にしたもう一冊の博士論文に、E・G・デ・ポールテルの『元能の「申楽談儀」の研究』（一九八二）がある。この飜訳には字義的注釈が付いていて、十四、五世紀の猿楽と田楽、世阿弥の伝記などについての章がいくつか加えられている。

飜訳

まず、オランダ独特の事情として、二つの要素を念頭に入れていただきたい。中等教育を受けたオランダ人の多くは、英語、ドイツ語、フランス語で書かれた一般書を自在に読む力を身につけている。個人差はあっても、日本文学蘭訳の必要度は、他の語圏内の諸国と事情を異にしている。書店内の上述の三ヵ国語文庫版のスペースは、オランダ語文庫本に与えられたものと大差なく、値段もあまり違わない。たとえば、三島由紀夫の作品などは英訳文庫本が一番手頃である。

オランダ語しか読めない者には、各外国語（主として前記の三ヵ国語）から蘭訳した文庫本がある。職業飜訳者がパンケーキを焼くような速度で重訳した製品で、安価ではあるが、重訳の欠陥は免かれない。谷崎潤一郎や三島由紀夫の作品のいくつかは、一般大衆でも読めることになったわけである。好例として、大江健三郎の『個人的な体験』がある。ジョン・ネーサンの米語版から、日本語を解さないマーシャル・ファン・ウイリンゲンが蘭訳している。

以上の状況下に、日本語からの直接蘭訳への希求が目立ってきたのは、とりもなおさず、日本文学に対する一般読者の関心が高まり、飜訳文の良否に注意を払う余裕が出てきたのであろう。そしてもう一方では日本語が読める人間が増加し、その中には日本文学作品の飜訳に意欲を持つ者が出現してきたのであろう。

日本語からのオランダ語訳の最初の文学作品は、近松門左衛門の戯曲集（一九二七）である。訳者S・ファン・プラーフの身元は現在何も知られていない。訳文はこの分野の権威ドナルド・キーン氏も評価しているほどである。前述のE・G・デ・ポールテルは五つの謡曲と四つの狂言を蘭訳して、最初の謡曲の題名『鶴亀』を書題にしている（一九七八）。訳者はベルギー人であるが、ライデン大学で学んだ。ベルギーの北半分はオランダ語圏地域なので、以下ベルギーの蘭訳活動も包括して述べたい。

私は一般読者層を対象にして『更級日記』を訳了した。出版準備中である。

コッペンス・フレンクス出版社は、最近明治、大正時代の日本文学シリーズを企画して、現在までにR・R・スヘップマン訳の、永井荷風の『すみだ川、墨東綺譚』と森鷗外の『雁』を出版している。さらに鷗外と国木田独歩の短篇集が続く予定である。

日本現代小説のすぐれた蘭訳者にC・アウエハントがいる。ライデン大学で民族学の分野で博士号を取得した、スイスのチューリッヒ大学の日本学教授である。一九六一年から八五年までに、川端康成の『千羽鶴』、『雪国』、『眠れる美女』、『みずうみ』と同作家の短篇集や、三島由紀夫の『金閣寺』を訳出している。異なった著者の作品の訳文を読んで、あたかも同一作家の文章を読んでいるような印象を与える訳文が少なくない。これは訳者が原文の持つ個性と文体を表現できない場合である。この点アウエハントの巧みな訳文は川端と三島を微妙に訳し分けることに成功している。オランダでは毎年二人の飜訳者、外国語からの蘭訳とオランダ語からの外国語訳に貢献した者に、賞が与えられているが、一九八五年の賞がアウエハント博士に贈られたことは喜ばしい。

次にデ・フローメン紀子の飜訳がある。大江健三郎の『（死者の奢りを含む）作品集』（一九七三）と

『田村隆一と現代六詩人の詩集』（一九八〇）が蘭訳されている。最も新しいものはC・M・ステーヘルス＝グルーネフェルトの谷崎潤一郎の『武州侯秘話』（一九八六）で、この訳者もライデン大学日本学の出身である。

カテゴリーは違うが、直接日本語から蘭訳された作品に、フォス・美弥子訳の松本清張の『アムステルダム運河殺人事件（と他三篇）』（一九七九）があるが、この特定の蘭訳の需要性については書名が明瞭に語っているであろう。

俳句熱

飜訳の仕事がややもすると軽視されがちなので、外国語文をかなりうまく読みこなせると自信がある者は、自分も容易に飜訳できると考える傾向がある。異なった作家の文体を訳文で表現するのもなかなか生易しい仕事でないことは先に述べた。もう一つの要点は、異なった文化背景の中の人物の「心象」と、その土壌がかもし出す雰囲気を把握して、読者に伝えることはまことにむずかしい。この点、文学作品に比べて、造形美術はかなり有利だと言えよう。飜訳された詩歌から感受する印象を美術作品が与える効果になぞらえると、俳句は墨絵の魅力を持っている。俳句を訳すのも、味わうのも、一見、いかにも平易で、単純そうであるが、途方もない一人よがりや的外れの解釈をする恐れがある。第二次世界大戦以前から、オランダ語で句作した詩人もいたが、本格的な人気が出たのは千九百五十年代以降だった。禅に対する狂信的流行に相まって、俳句の人気は上昇した。

一九六四年、同僚の中国学者、E・チュールヘルと共著の『無絃琴―禅についての一考察』の中で、私は俳句と俳文を紹介した。これは蘭訳俳句をオランダ読書界に紹介した最初である。この学術書は忽ち売り切れてしまったが、なんと言っても、オランダに俳句熱をもたらしたのは、J・ファン・トーレン訳の『俳句集』（一九七三）である。独学で日本語を習得した訳者は、美しいオランダ語で俳句の妙味を伝えるのに成功した。この本は六版を重ねた。訳者は続けて『川柳集』（一九七六）と『短歌集』（一九八三）の飜訳を発表した。オランダ人俳句狂たちは、一九八十年に俳人集団を結成し、ベルギーのフランデル俳句センターと合流し、四百人の会員を抱える大世帯になった。例会活動以外に、季刊「燧石」を発行している。この季刊誌はオランダ語の俳句発表の場だけではなく、日本文学についての論文、飜訳、書評を掲載している。

ベルギーのルーヴァン大学国際文学研究所のヘルレマンスは『短歌、俳句、川柳入門』（一九八〇）、前述のデ・フローメン紀子の『連句集―「猿蓑」の〝夏の月〟など』（一九八四）、ルーヴァン大学の日本学教授、W・ファンデ・ワルレの『芭蕉俳文集』（一九八五）などの訳業が出版されている。オランダとベルギーの俳人によい研究資料と刺激を提供することになるであろう。

オランダ語の俳句熱で私の気になるのは、俳句には深い思想が秘められているのだという、観念的な先入観が横行していることである。「5・7・5の三行、十七文字」という形式信奉が強く、季節感の表現などはいまだ遠い道である。しかし、このように批判的な私も、俳句熱現象そのものには、喜んでいる。俳句熱はやがて日本文学や日本文化全般への関心となり、日本への理解を深める方向へ歩んで行くであろうから。

（ライデン大学名誉教授・昭和六十年度外国人研究員）

文献

Caron, Françoys, Beschrijvinghe van het machtigh Coninckryck Japan, Amsterdam 1646.
Donker Curtius, J. H., Proeve eener Japansche Spraakkunst, Leiden 1857.
Hellemans, Karel, Tanka, haiku, senryū: Inleiding tot de Japanse Poëzie, Assen & Brugge 1980.
Hoffmann, J. J., Japanische Studien: Erster Nachtrag zur japanischen Sprachlehre, Leiden 1878.
Ouwehand, C., [Kawabata Yasunari:] De duizend kraanvogels, Lochem 1961.
Ouwehand, C., [Kawabata Yasunari:] Sneeuwland, Lochem 1962.
Ouwehand, C., [Mishima Yukio:] Het gouden paviljoen, Amsterdam 1966.
Ouwehand, C., [Kawabata Yasunari:] De schone Slaapsters, Amsterdam 1968.
Ouwehand, C., [Kawabata Yasunari:] Nagels in de ochtend en andere verhalen, Amsterdam 1971.

Ouwehand, C., 〔Kawabata Yasunari:〕 Het meer, Amsterdam 1985.
Pierson, J. L., The Manyōshū Translated and Annotated, I-XX, Leiden 1929-1963.
Pierson, J. L., Selection of Japanese Poems Taken from the Manyōshū, Leiden 1966.
Poorter, Erika de, De kraanvogel en de schildpad: Vijf Nō en vier Kyōgen, Amsterdam 1978.
Poorter, Erika Gerlinde de, Motoyoshi's Sarugaku Dangi: A Description and Assessment with Annotated Translation, Leiden 1983.
Praag, S. van, Monzaëmon Tjikamats' Dramatische Verhalen, Santpoort 1927.
Schepman, R. R., 〔Nagai Kafū:〕 De rivier Sumida/Verhaal van de oostkant van de rivier, Amsterdam 1985.
Schepman, R. R., 〔Mori Ōgai:〕 De wilde gans, Amsterdam 1985.
Siebold, Philipp Franz von, Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan, Leiden 1832-1858.
Steegers-Groenveld, C.M., 〔Tanizaki Junichirō:〕 Het geheim van de heer van Musashi, Amsterdam 1986.
Titsingh, Isaac, Nipon O Daï Itsi Ran ou Annales des Empereurs du Japon……ouvrage revu, complété et corrigé sur l'original japonais-chinois, accompagné de notes, et précédé d'un aperçu de l,histoire mythologique du Japon, par M.J. Klaproth, Paris-London 1834.
Tooren, J. van, Haiku: Een jonge maan, Amsterdam 1973.
Tooren, J. van, Senryū - De waterwilgen: Vierhonderdnegentig senryū-gedichten, Amsterdam 1976.
Tooren, J. van, Tanka - het lied van Japan, Amsterdam 1983.
Vos, Frits, A Study of the Ise-monogatari with the Text according to the Den-Teika-hippon and an Annotated Translation, 2 vols., The Hague 1957.
Vos, F. & Zürcher, E., Spel zonder snaren: Enige beschouwingen over Zen, Deventer 1964.
Vos, Frits, 「西洋の俳人」, 有坂隆道編『日本洋学史の研究』Ⅶ, 創元社, 昭和60年, 17−26頁。
Vos-Kobayashi, M., 〔Matsumoto Seichō:〕 De Amsterdamse koffermoord en andere verhalen, Amsterdam 1973.
Vroomen, Noriko & Pim de, Kenzaburo Oë: De hoogmoedige doden, Verhalen, Amsterdam 1973.
Vroomen, Noriko & Pim de, Oktober is mijn keizerrijk: Zeven moderne Japanse dichters, Amsterdam 1980.
Vroomen, Noriko & Ridder, Leo de, De zomermaan en andere Japanse kettingverzen uit de school van Matsuo Bashō, Amsterdam 1984.
Vuursteen: tijdschrift voor haiku, senryū en tanka, Haiku Kring Nederland & Haikoe Centrum Vlaanderen, 1981→
Walle, W. Vande, Bashō, dichter zonder dak: Haiku en poëtische reisverhalen, Leuven 1985.

共同研究中間報告

(一) 中世歌合の研究

福田秀一

歌合は、歌会歌・定数歌などと共に和歌史のいわば一次資料であり、特に中世歌合は、その歌風や批評（判詞）の点でも歌人構成や歌壇の面からも、和歌史研究上重要なものである。その現存するものは約二〇〇に及ぶが、大部分については伝本の調査も不十分で、成立年時や主催者・作者・判者・本文等の確定にも精査を要するものが少なくない。

そこで井上宗雄氏を代表とするわれわれ八名は、それら中世歌合の実体を究めてその文学的価値や文学史的位置づけを明らかにしたいと考え、差し当って今年度の「共同研究」としては、次の諸点に取り組むこととした。

一、中世歌合（本文の少くとも一部が現存するもの）年表の作成
二、各歌合の伝本書目の作成
三、主要歌合の本文研究
四、中世歌合に関する参考文献一覧の作成

そして目下は、一と四とを各自分担してカードに摘記中である。その際当館所蔵の目録類や年鑑・文献目録類、更にはマイクロ資料にも少なからぬ便宜を得ているが、歌合伝本のカードとりに際しては、われわれの何人かがかつて経験した私家集や私撰集と違って、文庫目録の類からは歌合名を特定しにくいものが意外に多いことに気づいた。更に、この機会に一つお願いを言うと、目録を出していない（あるいは出していてもわれわれの見落す恐れのある）図書館・文庫や、更には個人等で中世歌合を所蔵しておられる方も少なくないと思うが、もしもそうした伝本をおしらせ頂ければ、われわれのみならず学界にとって有益この上ないと信ずる。

（国文学研究資料館教授）

(二) 哭濱田義一郎先生

——江戸狂歌本の書誌的研究——

宇田敏彦

六月十一日、この日のなんたる悪日であったことか。

同日夕刻六時、浜田先生が御他界になったのである。共同研究「江戸狂歌本の書誌的研究」の代表者としての先生に、一年有半、親しく薫陶を受けてきた私共にとってすら、先生の死は、いかにしても突然であった。

私事ながら、その頃、私は遠来のアメリカの友を迎えて、都立中央図書館の木村さんと広尾のさる鰻屋に出向かんと、時を見計らっていたのである。この鰻屋こそ、かつて先生が「鄙には稀」と賞美なさった日付きの店であった。当然先生のお噂に花が咲いたのであるが、なんたることか、お目当の店は休業。今にして思えば、これが虫の報せというべきものかと、そんな気がして仕方がない。

先生が食を楽しむ名人であったことは、人のよく知る所であるが、今に私の心を離れないのは、「もう先が長くはないのだから、せめて、いけないものだけは食べたくない」とおっしゃって、資料館周辺での昼食すら、厳しくお選びになっていらっしゃったことである。もっとも、この〈いけないもの〉と〈よろしいもの〉とを峻別なさる態度は、先生の学風を最もよく示していたように思われる。先生の学問の枠組みは、ゆったりとしているようでありながら、実に緻密に組立られていたのである。それを思い知らされたのが、資料館の共同研究の席上であった。先生はかねがね、「狂歌よりも川柳の方が好きだ」とおっしゃっておられたのであるが、そのお好きでない狂歌本を実によく御覧になっておられ、私共の青臭い善本措定の論議に明確な指示を与えて下さった。今日まで、私共の共同研究が無事渉って来たのはその賜物である。

その先生も今はない。そして不肖私が後を引き継ぐこととなったが、幸い格好のスタッフに恵まれて、基礎的な調査も着々と進展するとともに、狂歌本二千百五十余のコンピュータ処理も終わっているので、「なんとか勤まるかな」と楽観している。今後はこれらの調査結果に基づいて、データを補訂し、より精確な狂歌書目の集成が目標となるであろうが、この完成こそが、先生の学恩に報いる私共の唯一の道と思っている。

（戸板女子短期大学教授）

(三) 本朝文粋における願文の研究

小峯和明

数年前に和漢比較文学会が創設され、この学会を中心に『和漢比較文学叢書』（汲古書院）も刊行されはじめ、日本漢文学や中国文学との比較研究の気運がようやく高まりつつあるようだ。そうした情勢に鑑み、本研究では仏事・晴儀の文学として重要な位置を占めながら従来ほとんど研究されていない願文を対象とすることにした。

願文とは、仏事・法会の場でその趣旨や願意を朗唱する文章で、当代一流の文人が述作するのが慣例であり、対句をはじめ修辞をこらした漢文学の精華として尊重され、その摘句は諷誦・表白文と並んで他の文学ジャンルに少なからぬ影響を与えている。

願文の述作は平安朝を頂点に今日に至るまで脈々と続き、厖大な量にのぼる。そのため、今年度は最も質が高く後代の規範ともされる『本朝文粋』巻十三・十四に収録された願文二十数篇をとりあげる。伝本の比較検討による本文校訂、注釈、表現形式、修辞法、仏典や中国文学・故事との関連、述作の契機や背景、講会の場の意義、同時代の文学ジャンルとの対応、後代文学への影響等々、さまざまな面から総合的に考察し、その文学史上の意義を解明できればと考えている。

全く未開拓の分野であるため、種々の困難が予想されるが、各自の視点と方法にもとづく発表と共同討議とによって分析を進めていきたいと思う。

（国文学研究資料館助教授）

(四) 江戸時代堂上和歌聞書の研究

嶋中道則

江戸時代の堂上和歌についての研究は、近世文学研究において従来軽視されてきたが、近年、次第に研究者の数も増し、新たな光があてられようとしている。といっても、研究の立ち遅れは、依然として甚しい。それは、上野洋三氏の研究などによって、その重要性が認識されつつある堂上歌論においても同様である。堂上の人々の歌論は、門人が師から口授された教えを書き留めた「聞書」によって窺うしかないのだが、その「聞書」の基本的なリストも作られていない状況で、伝本調査に至っては、糸口についたともいえない状況である。

こうした現況をふまえ、本共同研究では、まず第一に、堂上家の「聞書」のリストを作り、その伝本の所在を明らかにすることを目標とした。その一環として、現在、『国書総目録(著者別索引)』等の目録にあたって、堂上家の著述をリストアップし、その中から歌学書(注釈書を含む)を拾い出すこと、また書名だけからではそれがいかなる書物であるか判断に迷うことも多いので、とりあえず、国文学研究資料館蔵の紙焼写真をもとに、堂上家の著述を調査して、「聞書」書を認定すること等の作業を進行中である。

更に、これらの作業と併行して、未飜刻の「聞書」資料の内、写真等で入手しやすい作品を選び、その内容調査を行うこととし、現在『義正聞書』(冷泉為村答・宮部義正問)の輪読を進めているところである。

(東京学芸大学助教授)

(五) 富士谷成章旧蔵「哥仙集」

——三十六人集諸本の研究——

新藤協三

富士谷成章(一七三八～七九)には歌仙家集本文に関する研究があり、明和三年(一七六六)には歌仙家集の校訂を行っている外、さらに、これを補訂して安永三年(一七七四)ごろに「歌仙家集補」(三十六人集補とも)三冊を著している。これは、歌仙家集正保版本にない歌を別系統の本文から補ったものであるが、校勘に用いた別系統本文とは、凡例の「刊本世に流布する所古本　江田世恭所蔵　豊前本　家本右三本をもて校合に」より、「古本」「家本」なるものである。このうち「古本」は、所謂「豊前本」であって現存するが、同じく凡例に高光集の替わりに匡衡集が入る旨を注するので、西本願寺本系統の本文と知られる。一方「家本」については、「家本奥書云／此哥仙集全部六冊従天和二年中旬至同四月上旬遂書写功即一校合早写本誤多以證本可令再校者也(花押)」と奥書を転写するが、本文系統を知る手がかりとなるような記載はない。

ところで、共同研究「三十六人集諸本の研究」の作業過程で管見し得た伝本の一つ、山形大学蔵(911.1 K8 1-1～1-6)「哥仙集」六冊本は、その奥書が歌仙家集補に言う「家本」のそれと全く一致し、書風もまた天和二年(一六八二)ころと認め得るので、この山形大学本は成章所持の「家本」そのものであると思われる。詳細は別に発表する予定であるが、該本は二十七集が正保版本系本文である外、家持・兼盛・順・重之・中務の五集は西本願寺本系、躬恒・兼輔・伊勢・赤人の四集はまた別系統であって、成章旧蔵「哥仙集」の全貌を知ることができる。閲覧の便を賜わった後藤利雄氏に感謝する次第である。

(国文学研究資料館助教授)

(六) 日本文学の特質

上田　真

筆者は九月に来日したばかりであり、メンバーの顔合わせもまだ行なっていない段階である。

作品の結末のありかたに注目し、世界文学との対比において日本文学の特質を折出してみたい。

(スタンフォード大学教授・国文学研究資料館客員教授)

国文学研究資料館評議員

任期　昭和61年7月1日～昭和63年6月30日

阿部秋生　東京大学名誉教授・実践女子大学名誉教授
猪瀬　博　東京大学工学部長・学術情報センター所長事務取扱
今井源衛　梅光女学院大学文学部教授・九州大学名誉教授
上山春平　京都国立博物館館長　京都大学名誉教授
小田切　進　立教大学文学部教授・日本近代文学館理事長
加藤周一　学習院大学名誉教授
児玉幸多　国立劇場会長
斎藤　正　甲南女子大学文学部教授・京都大学名誉教授
阪倉篤義　早稲田大学文学部教授
神保五彌　梅花女子大学文学部教授・大阪大学名誉教授
田中　裕　国立歴史民俗博物館館長・東京大学名誉教授
土田直鎮　大阪文化財センター理事長
坪井清足　慶應義塾大学名誉教授
中井信彦　早稲田大学文学部教授
橋本不美男　国立国語研究所名誉所員
林　大　東京大学名誉教授
古島敏雄　東京大学名誉教授
松田智雄　羽衣学園短期大学学長・大阪教育大学名誉教授
宮川　満　東京大学名誉教授
山本達郎

国文学研究資料館運営協議員

任期　昭和61年8月1～昭和63年7月31日）

秋山　虔　東京女子大学文理学部教授・東京大学名誉教授
有吉　保　日本大学文理学部教授
伊藤正義　大阪市立大学文学部教授
久保田　淳　東京大学文学部教授
小林清治　福島大学教育学部教授
佐竹昭廣　成城大学文芸学部教授・京都大学名誉教授
秀村選三　久留米大学商学部教授・九州大学名誉教授
尾藤正英　千葉大学文学部教授・東京大学名誉教授
松本隆信　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫長・同教授
水谷静夫　東京女子大学文理学部教授
棚町知彌　国文学研究資料館研究情報部教授
長谷川　強　国文学研究資料館文献資料部教授
福田秀一　国文学研究資料館文献資料部教授
藤村潤一郎　国文学研究資料館史料館教授
本田康雄　国文学研究資料館整理閲覧部教授
森　安彦　国文学研究資料館史料館教授
安澤秀一　国文学研究資料館史料館教授
安永尚志　国文学研究資料館研究情報部教授
山中光一　国文学研究資料館研究情報部教授
渡邉守邦　国文学研究資料館文献資料部教授

国文学文献資料収集計画委員会委員

任期　昭和61年4月1日～昭和62年3月31日

池田利夫　鶴見大学図書館長・文学部教授
片桐洋一　大阪女子大学学芸学部教授
金沢規雄　宮城教育大学教育学部教授
鳥越文蔵　早稲田大学文学部教授
富山　奏　四天王寺国際仏教大学附属図書館長・文学部教授
藤平春男　早稲田大学文学部教授
松本隆信　慶應義塾大学附属研究所斯道文庫長・同教授
馬淵和夫　中央大学文学部教授
水原　一　駒澤大学文学部教授
米原正義　國學院大学文学部教授

文献目録委員会委員

任期　昭和61年4月1日～昭和62年3月31日

池内輝雄　大妻女子大学短期大学部教授
遠藤　宏　成蹊大学文学部教授
大矢武師　東京家政学院短期大学教授
久保田　淳　東京大学文学部教授
小島孝之　立教大学文学部助教授
小町谷照彦　東京学芸大学教育学部教授
滝藤満義　横浜国立大学教育学部助教授
浜野卓也　山口女子大学文学部教授
原　道生　明治大学文学部教授
安田尚道　青山学院大学文学部助教授
吉田熙生　大妻女子大学文学部教授

情報処理システム運用委員会委員

任期　昭和61年4月1日～昭和62年3月31日

石田晴久　東京大学大型計算機センター教授
稲岡耕二　東京大学教養学部教授
井上　如　学術情報センター教授
宇賀正一　国立国会図書館総務部情報処理課長
杉田繁治　国立民族学博物館第五研究部助教授
照井武彦　国立歴史民俗博物館情報資料研究部教授
西村恕彦　東京農工大学工学部教授
濱田啓介　京都大学教養部教授
星野　聰　京都大学大型計算機センター教授
堀内秀晃　青山学院大学文学部教授
水谷静夫　東京女子大学文理学部教授

国文学文献資料調査員

任期　昭和61年4月1日～昭和62年3月31日

〔北海道・東北〕

名子喜久雄　山形大学教育学部助教授
廣瀬朝光　岩手大学人文社会科学部教授
藤田洋治　鶴岡工業高等専門学校講師
松野陽一　東北大学教養部教授
丸山　茂　盛岡大学文学部教授

〔関東〕

東　聖子　十文字学園女子短期大学講師（非）
池田和臣　茨城大学人文学部助教授
池田俊朗　京北高等学校教諭
石川　了　大妻女子大学短期大学部助教授
板坂則子　群馬大学教育学部助教授
宇田敏彦　戸板女子短期大学教授
加藤定彦　立教大学一般教育部助教授
兼築清恵　早稲田大学演劇博物館助手
川平ひとし　跡見学園女子大学文学部助教授
川村晃生　慶應義塾大学文学部助教授
清登典子　放送大学学園埼玉教育センター助教授
島本昌一　法政大学第二高等学校教諭
武井和人　埼玉大学教養部助教授
竹本幹夫　実践女子大学文学部助教授
谷地快一　東洋大学短期大学講師
辻　勝美　日本大学文理学部講師（非）
中野沙惠　東京女子医科大学医学部講師
西澤美仁　実践女子大学文学部講師
林　達也　駒澤大学文学部教授
牧野和夫　東横学園女子短期大学助教授
森川　昭　東京大学文学部教授
湯澤質幸　筑波大学文芸言語学系助教授

〔中部〕

秋間康夫　同朋大学文学部助教授
稲田篤信　富山大学教養部助教授
黒田　彰　愛知県立大学文学部講師
坂田　新　愛知県立女子短期大学助教授
沢井耐三　愛知大学文学部教授
鷹尾　純　愛知淑徳短期大学助教授
竹村信治　金沢美術工芸大学美術工芸学部講師

長島弘明　名古屋大学文学部講師
西村聡　金沢大学文学部講師
服部仁　同朋大学文学部助教授
二澤久昭　長野工業高等専門学校教授
舩城俊太郎　新潟大学人文学部助教授
安田文吉　南山大学文学部助教授
矢羽勝幸　長野工業高等専門学校講師
山本一　金沢大学教育学部講師
渡邊信和　同朋学園仏教文化研究所助手

〔近畿〕

池田正志　甲南高等学校教諭
宇城由文　京都女子大学短期大学部講師(非)
大谷俊太　京都大学文学部助手
大取一馬　龍谷大学文学部助教授
神尾暢子　大阪教育大学教育学部助教授
菊川丞　関西外国語大学外国語学部助教授
小林健二　大谷女子大学文学部講師
櫻井武次郎　親和女子大学文学部教授
塩崎俊彦　神戸山手女子短期大学講師
高橋喜一　梅花女子大学文学部教授
田中登　帝塚山短期大学助教授
永井一彰　奈良大学文学部助教授
橋本直紀　羽衣学園短期大学助教授
廣田哲通　大阪女子大学学芸学部講師
藤田真一　京都府立大学女子短期大学部助教授
松林靖明　帝塚山短期大学教授
源義春　神戸女子大学講師(非)
山本登朗　光華女子大学文学部学部助教授
渡邊志津子　大阪大学文学部助手助教授

〔中国・四国〕

浅野日出男　山陽女子短期大学講師
石川一　徳島文理大学文学部講師
井出幸男　高知大学教育学部助教授
河合眞澄　愛媛大学教養部講師
松原秀明　金刀比羅宮図書館嘱託
宮田尚　梅光女学院大学短期大学部教授
山崎誠　広島女子大学文学部助教授
渡辺憲司　梅光女学院大学文学部助教授

〔九州〕

板坂耀子　福岡教育大学教育学部助教授
小川幸三　熊本短期大学教授
小川豊生　大分工業高等専門学校講師
田中道雄　佐賀大学教養部教授
中野三敏　九州大学文学部教授
中本環　熊本大学教育学部教授

国文学文献資料特別調査員

阿部泰郎　元興寺文化財研究所研究員
市古夏生　白百合女子大学文学部助教授
伊藤正義　大阪市立大学文学部教授
稲垣泰一　金城学院大学文学部教授
大石房子
大岡賢典　流通経済大学経済学部助教授
片桐登　法政大学教養部教授
片野達郎　東北大学教養部教授
金沢規雄　宮城教育大学教育学部教授
佐藤恒雄　香川大学教育学部教授
猿田知之　茨城キリスト教短期大学教授
滝澤貞男　信州大学教育学部教授
竹内千代子　京都府立鳥羽高等学校教諭
田村憲治　愛媛大学法文学部助教授
土井洋一　学習院大学文学部教授
長友千代治　愛知県立大学文学部教授
名和修　陽明文庫主事
錦仁　秋田大学教育学部助教授
森田蘭　四国女子大学附属図書館長・文学部教授

国際日本文学研究集会委員会委員

任期　昭和61年4月1日～昭和62年3月31日

池田重　青山学院大学文学部教授
ドナルド・キーン　コロンビア大学教授
アラン・ターニー　清泉女子大学文学部教授
芳賀徹　東京大学教養学部教授
長谷川泉　学習院大学講師(非)

共同研究委員会委員

任期　昭和61年4月1日～昭和62年3月31日

秋山虔　東京女子大学文理学部教授
稲賀敬二　広島大学文学部教授
島津忠夫　大阪大学教養部教授
神保五彌　早稲田大学文学部教授
松崎仁　立教大学文学部教授

古典籍総合目録委員会委員

任期　昭和60年4月1日～昭和62年3月31日

菊地勇次郎　大正大学文学部教授
柴田光彦　跡見学園女子大学文学部教授
田中久文　東京大学附属図書館事務部長
堤精二　お茶の水女子大学附属図書館長・文教育学部教授
野村文保　国立国会図書館収集整理部国内図書課長
森川彰　梅花女子大学文学部教授

共同研究員

任期　昭和61年4月1日～昭和62年3月31日

井上宗雄　立教大学文学部教授
佐藤恒雄　香川大学教育学部教授
紙宏行　文教大学女子短期大学部専任講師
兼築信行　早稲田大学高等学院教諭
山田洋嗣　立教高等学校講師(非)
今井明　早稲田大学大学院博士課程
湯浅忠夫　学習院大学大学院博士課程
宇田敏彦　戸板女子短期大学教授
粕谷宏紀　日本大学文理学部教授
延廣真治　東京大学教養学部助教授
石川了　大妻女子大学短期大学部助教授
石川俊一郎　慶應義塾高等学校講師(非)
渡辺秀夫　信州大学人文学部助教授
山崎誠　広島女子大学文学部助教授
森正人　熊本大学文学部助教授
佐藤道生　慶應義塾大学大学院博士課程
嶋中道則　東京学芸大学助教授
市古夏生　白百合女子大学文学部助教授
揖斐高　成蹊大学文学部教授
鈴木淳　國學院大学日本文化研究所助教授
林達也　駒澤大学文学部教授
和田道子　日本学術振興会特別研究員
清水素子　東京大学大学院博士課程
鈴木健一　東京大学大学院博士課程
坂内泰子　國學院大学日本文化研究所嘱託研究員
古相正美　横浜国立大学教育学部教授
平田喜信　鶴岡工業高等専門学校講師
藤田洋治　筑波大学大学院博士課程
加藤幸一　大東文化大学大学院博士課程
田辺俊一郎　名古屋大学教養部助教授
高橋亨　大妻女子大学文学部教授
三好行雄　中央大学文学部教授
佐伯彰一

文献資料部事業報告

長谷川　強

昨年末より調査・収集の後始末と今年度の計画立案、二度の収集計画委員会を経て去る五月の調査員会議開催によって、今年度の仕事も例年通りのレールに乗った。この間に二度の調査カードの検討会もはさまり多忙の日々であったが、関係各位の多大の御協力を得た。御礼申上げるとともに、今年度も大過なく計画が遂行できるようにと願うものである。

昭和六十年度国文学文献資料調査・収集の概況

一、調査

現年度は、本年三月末までに右の一四〇箇所（予備調査＝＊印を含む）の所蔵資料計八一八六点を調査した。なお、予備調査として＊印を付したもの以外にも、展示を見ての報告など、当館としてのいわば正式な調査の手続きによらないものもあるが、それぞれ情報として有益なので記録保存することとし、ここにも掲げておく。

北海道東北地区（順不同、敬称略、一部略称、以下同じ）

弘前市立弘前図書館・盛岡市中央公民館・酒田市立光丘文庫・鶴岡市郷土資料館・光明寺・東北大学附属図書館（狩野文庫）・工藤家＊

関東地区

彰考館・流通経済大学図書館（祭魚洞文庫）・大前神社・埼玉県立文書館・学習院大学国語国文学研究室・東京芸術大学附属図書館・東京大学国文学研究室・東京都立中央図書館（加賀文庫他）・永青文庫・東洋文庫・松宇文庫・久松国男（当館寄託本）・法政大学能楽研究所（鴻山文庫）・宮内庁書陵部・神奈川県立金沢文庫＊・大倉精神文化研究所＊・横須賀市立図書館＊・福田秀一・内閣文庫＊・国立国会図書館＊・国学院大学＊・森山真司・大東急記念文庫＊・静嘉堂文庫＊・柳田為正＊

中部地方

新潟大学附属図書館（佐野文庫）・上越市立高田図書館（榊原本）・富山県立図書館＊・石川県立郷土資料館（大鋸コレクション）＊・石川県立金沢泉ヶ丘高校＊・勝山市史編纂資料室＊・福井市立郷土歴史博物館（越葵文庫）・武生市役所（寄託本）・長野市教育委員会（真田文庫）・上田市立図書館（花月文庫）・角田光代・浜松市立賀茂真淵記念館＊・愛知県立大学図書館（古俳書㈠）・金城学院大学図書館・名古屋市立鶴舞中央図書館・同蓬左文庫（尾崎コレクション）・名古屋大学附属図書館（神宮皇学館文庫）・岐阜市立図書館加納分館＊・石水博物館＊・常住寺閻魔堂・神宮文庫・金沢大学附属図書館・金沢市立図書館＊・月明文庫＊・加賀市山代温泉山下屋・静岡県立中央図書館＊・清水市立図書館＊・西尾市立図書館（岩瀬文庫）＊・石川県立美術館・某寺・野口克也＊・飯田市立図書館＊・志賀山文庫・新城市教育委員会（牧野文庫）＊・三重県立図書館＊・沖森書店・龍光禅寺

近畿地区

服部琢磨・西教寺・伏見桃山城・陽明文庫・立命館大学図書館・舞鶴市立西図書館・園部町教育委員会（小出文庫）・大和文華館・不退寺・某寺（橿原市）・大方保・大橋正勝・茨木神社・東大阪市郷土博物館・国立文楽劇場・香具波志神社・大阪女子大学附属図書館・逸翁美術館・林田良平（蝸牛廬文庫）・堺市博物館・菅生神社・弘川寺西行記念館（西行コレクション）・光徳寺・服部天神文庫＊・温泉寺・篠山藩振徳版木館・洛東遺芳館＊・住吉大社（神社本）＊・双林寺＊・醍醐寺＊・東寺＊・京都大学附属図書館＊・京都女子大学附属図書館＊・京都府立総合資料館＊・京都府立図書館＊・龍谷大学図書館＊・中之島図書館＊・天理図書館＊・奈良県立奈良図書館・奈良国立博物館＊・池田文庫＊・柿衛文庫＊・兵庫県立歴史博物館・大阪市立博物館＊・大阪府立富田林高等学校（菊水文庫）・新宮神社＊・熊野那智大社＊・

中国四国地区

厳島神社・野坂宮司家・萩市立図書館・西円寺・村上家・多和文庫・松本真一・今治市河野信一記念文化館・大洲市立図書館＊・小松町立公民館＊・高知県立図書館（山内文庫）・津山郷土館＊・広島県立図書館＊・山口県文書館＊・鳥取県立博物館＊・鳥取県立図書館＊・宮島町立宮島歴史民俗資料館

九州地区

祐徳稲荷神社・熊本県立図書館・臼杵市立臼杵図書館・佐賀大学附属図書館（鍋島文庫）＊・諫早市立諫早図書館＊・高鍋町立高鍋図書館＊

二、収集

本年三月末までに左の二九箇所の所蔵資料計四八一二点を収集した。

関東地区

矢口丹波記念文庫・麓沢大学図書館（田中文庫）・東京芸術大学附属図書館・東洋文庫（紙焼写真）・学習院大学国語国文学研究室・法政大学能楽研究所（鴻山文庫）・松宇文庫・福田秀一・福田秀一（カラー）

中部地区

金沢市立図書館（稼堂文庫）・加賀市立図書館（聖藩文庫）・上田市立図書館（花月文庫他）・刈谷市立刈谷図書館（村上文庫）・金城学院大学図書館・新城市教育委員会（牧野文庫）・神官文庫

近畿地区

彦根市立図書館（琴堂文庫）・京都女子大学附属図書館（吉沢文庫）・陽明文庫・大方保・温泉寺・大阪大学附属図書館（赤木文庫）・大和文華館

中国四国地区

多和文庫・今治市河野信一記念文化館・高知県立図書館（山内文庫）・宇部市立図書館（新井文庫）

九州地区

熊本大学附属図書館（北岡文庫）・臼杵市立臼杵図書館

昭和六十一年度文献資料調査・収集計画（国内）

例年通りの手順で収集計画委員会の検討を経て、五月の調査員会議で了承を得た計画は、調査六九箇所九四三五点、収集三六箇所七二八八点である。前掲の六十年度の結果より見て少しく過大で、実施に当っては繰延べを要する事もあろう。松宇文庫の今年度の調査・収集は講談社の御好意で七月中に撮影を終り、調査は七月中旬より約二箇月をかけ、二年にわたる作業を終了の見込である。改めて同社の担当の方々に御礼申上げる。

海外資料の調査・収集

一、前号に触れたソウル大学校への御礼の複写物は四月に完成、お送りした。

一、台湾大学研究図書館の旧台北帝大本の調査は、何らかの形で結果をまとめ、収集にも結びつけるべく計画中である。

一、先年調査したカリフォルニア大学バークレー校の旧三井文庫本を中心とする版本・写本の収集については、先方の御了承を得たので、七月中に希望リスト提出の予定である。

第四室

今年度も早稲田大学の雲英末雄教授にお願いし、松宇文庫の調査を御推進いただく事になった。併任の助教授は前年同様前・後期各半年にわけ、菊地仁氏（山形大）、田村憲治氏（愛媛大）にお願いし、当部で計画している寺社資料の調査に御協力いただく事にした。

地区会議

前号にしるした北海道東北地区の会議を予定通り二月に仙台で開いた。今年度は秋に中国四国地区・中部地区について開催を計画している。また今年度は転出者なく、補佐員を含め顔触れに変動はない。ただ事情により長谷川が福田に代った。今後とも一層の御指導・御協力をお願いするものである。

（文献資料部長）

第10回国際日本文学研究集会

於国文学研究資料館

11月13日(木)　午後1時20分～5時10分

8世紀東アジア状況の中における万葉集の成立　山口　博（富山大学）

古事記と近親相姦　村上史朗（シンガポール国立大学）

博文学の特殊性――道元の教えと良寛――　石上―イアゴル・ニッツァ　美智子（フランス国立科学研究所）

日本文学における感情の表現　レオン・ゾルブラッド（ブリティシュ・コロンビア大学）

没理想論争の今日的意味　大嶋　仁（静岡大学）

宮沢賢治の物語における無垢の観念　萩原孝雄（ブリティシュ・コロンビア大学博士号取得）

11月14日(金)　午前10時半～午後4時30分

カール・フローレンツの日本文学史　佐藤マサ子（お茶の水女子大学大学院）

現代文学批評によって「文学史」を考えなおす　ジョン・ウィティア・トウリート（ワシントン大学）

近代日本文学における西洋人のイメージ　鶴田欣也（ブリティシュ・コロンビア大学）

シンポジウム・日本文学史について

加藤周一（評論家）

ドナルド・キーン（コロンビア大学）

小西甚一（筑波大学名誉教授）

11月15日(土)　午前10時半～午後5時50分

源氏物語――光源氏の栄華と子孫――　金鍾徳（東京大学大学院）

加藤道夫の戯曲「なよたけ」　ケネス・リチャード（トロント大学）

竹取物語とフランス中世の短篇物語　小沢正夫（中京大学）

〈公開講演〉

日本文学における「終わり」の感覚　上田　真（スタンフォード大学）

「寡す」ということ――近代文学の成立と小説論――　ジャン＝ジャック・オリガス（フランス国立東洋言語文化研究所）

研究情報部事業報告

棚町知彌

当部では、研究情報データベースのサービス実施も日程にのぼった状況に対応すべく、業務と組織の再編成を行った。すなわち臨時論文検索室は五月末日をもって廃止、編集室がその業務をひきつぐことになった。これに伴い、六月一日から、山中教授が編集室長となり、百川助教授が情報室長となった。

情報室

情報室は、館報の発行・新聞情報の収集・国際日本文学研究集会の開催の業務を行っている。

編集室

『国文学年鑑』(昭和五十九年版)の編集を行い、例年のように三月二十五日至文堂から刊行した。

論文の増加に伴って年鑑は年々部厚くなり、編集作業も容易でなく単価も増すことになるので、今回から単行本解説(五十八年版一四九頁)を思い切ってより簡略化した単行本目録(五十四頁)に変更したが、それでも全体では六〇〇頁を超え、五十八年版に近い厚さとなった。

また今回から出版社の事情もあって印刷に電算写植が使用され、双方の不慣れのため割り付け校正に手間どったので、今年度編集する六〇年版では当初から電算写植を前提として、割り付けも電算機で行うCTS(コンピュータ・タイプセッティング)化をはかり、同時に、今まで年鑑が発行された後に改めてデータベース蓄積のための入力を行っていた作業の手数を省き、原データの入力を共用する方式で年鑑製作を行うように業務を進めている。

情報処理室

電子計算機の運用・運転を除く昭和六十年度事業は、以下のように実施した。

(1)目録作成

定常的な業務として、

①国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録(一九八五)(七一一頁、索引部二〇〇頁)

②同累積簡略版(業務用)

③国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録(一九八六)

④国文学研究資料館蔵和古書目録増加3(一九八四―一九八五)の版下作成を行った。

(2)データ入力等

上記目録用データの入力等の運用のほか文字フォント(百六字)の作成を行った。

(3)システム開発

以下のシステム開発を行った。

①古典籍総合目録作成システム

著作構造ローダおよび各種業務リスト作成システムの開発を行った。またマイクロ資料目録システム・和古書目録システムを古典籍総合目録作成システムへ総合化するためのシステム概要設計を行った。

国書入力システムについては、著者ローダ入力ファイル作成、著者名ファイル作成、各種チェックリスト作成等のシステムを開発した。

②運用管理システム

運用管理データの入力・蓄積システムおよび管理レポート出力システムの開発を行った。

③文字セット管理システム

JISコード表および新字源(角川書店)改訂のため、文字セット管理システムについて1文字属性ファイルの構造変更2管理プログラム群の変更3文字属性情報変更システム開発4文字属性変更作業等を行った。

④和古書目録システム

昨年度までのバッチ処理の形態の作業から業務担当者によるオンライン業務処理への移行および目録情報のオンライン検索のためのシステム開発等を行った。

(研究情報部長)

整理閲覧部事業報告

本田康雄

当館で撮影・収集した保存用ネガフィルムの外部保管委託は、昭和六十年度から開始したものであるが、六月に昭和五十六～五十九年度収集分の保存用ネガフィルム四、四八二リールについて外部保管委託を実施し、前年度外部保管委託を実施した八、六四九リールと合わせ昭和五十九年度までの収集分一三、一三一リールについて委託を完了した。この結果、次年度以降は収集年度毎に順次保管を委託することとなる。

また、当館蔵マイクロ資料目録

の刊行は、一九八五年版をもって第九冊となるが、各年度版刊行で蓄積されたデータを、より効率的に検索できるようにするため、現行のシステムを使用して累積目録を作成し閲覧室に備えることとし、情報処理室の協力を得て累積目録の原版を作成した。作成に当って年度版間の統一書名の齟齬を整理するとともに、データの誤りが判明したものについては、その訂正を加える等、データ整備作業の成果として、最新の内容のものとなっている。

所蔵資料統計

（昭和61年3月末現在）

資料種別		点数	冊(リール)数
マイクロ資料	マイクロフィルム※	71,948点	15,891リール
	マイクロフィッシュ	3,397点	10,008枚
	紙焼写真本	46,101点	37,888冊
図書（古書及び新刊書）		18,641点	61,052冊
逐次刊行物		3,035誌	75,282巻号冊
寄託図書		141点	178冊

※　他に紙焼写真による収集(658点)がある。

なお、現在、閲覧室内のオンライン端末を利用して試行しているマイクロ資料目録のオンライン検索は、書名、著者名による索引としての利用を、館外利用者の直接利用方式により試験的に実施しているが、利用者の声を広く集め、所要の改善を行って、より使い勝手のよいシステムを構成する方向で検討している。

なお、古典籍総合目録委員会（昭和六十年度）を昭和六十一年三月十八日に開催したほか、当部が担当する業務は、今期も順調に進展した。

(一)整理閲覧室

(1)受入業務

昭和六十年度の受入資料数は、マイクロ資料（ロールフィルム九七二リール、紙焼写真本二、七八〇冊）、図書（二、二九七冊）、逐次刊行物（継続受入等約一、五五〇誌）、雑誌製本（三二〇冊）であった。その結果、昭和六十年度末での全蔵書数は、別表のとおりとなった。

昭和六十一年度も、予算の確定に伴い、例年どおり資料の受入れを行っている。ひきつづき、図書選定小委員会その他の協力を得ながら国文学を中心に周辺領域を含めて総合的な収集・受入れに努めたい。

(2)古典籍総合目録作成事業

書誌データ（当館の整理方式によって全国の文庫・図書館の所蔵目録から転記し作成する。ただし、図書総目録に採録された以外のもの。）約三千三百件の作成・パンチ・入力チェックを行った。この結果、累積で約六万三千件の書誌データの入力チェックが完了した。このうち約六千五百件の書誌データについては、データベースに登録し、著作コントロール（同一書のとりまとめ。特定の作品に関する諸本・諸版を同一の作品としてとりまとめ、書誌データと著作データとを結びつけること。）を行った。

著作データは、同名異書・異名同書を識別するための典拠となるデータで、成立年等の作品に関する情報を扱うものであるが、書誌データに対応して国書総目録に採録された以外のもの約五千五百件を作成し、著者コントロール（同一著者のとりまとめ。ある著者が著した作品を集中させるために、作品に現れる種々の著者名を統一すること。）を行っている。なお、著作データの作成と並行して、国書総目録の作品典拠にあたる部分（所在情報を除いたもの。）をデータベース化する古典作品典拠ファイル作成事業が進行中である。（次項参照。）

今年度には、書誌データ約三万件の著作コントロールと、この作業の過程で作成する著作データの著者コントロールを予定している。

(3)整理業務

『国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録一九八五年』（二十五文庫、八、〇二五点収録）を刊行した。ひきつづき、一九八六年版のデータ作成を行い、既に約六千点の入力、校正作業を完了している。

古典作品典拠ファイル作成事業は、システムの完成を承けて、約九千件のデータの処理を行い、著作ファイルへロード（登録）するばかりになっている。パンチ、校正作業も並行して、続行中である。

和古書整理の方は、増加目録としては三冊目に当る、『国文学研究資料館蔵和古書目録一九八四―一九八五』を刊行した。

その他、和古書の補修を約一、二〇〇丁分行った。

(4)閲覧業務

昭和六十年度は、入室者数が八、六五九人(一日平均三一人)、利用登録者が一、九一〇人(一日平均七人)、文献複写が一八、一一〇件(一日平均六五件)で、いずれも前年度に比べて増加した。利用登録者数は累計(三月末まで)で一五、〇三二人となり、一万五千人を突破した。

また、相互利用の申込受付も一、〇〇八点と前年度を大きく上回った。

本年三月に、全国の大学図書館等の所蔵情報を収録した『学術雑誌総合目録　和文編』(一九八五年版)が刊行された。これには当館の所蔵情報も収録されており、今後は、郵送による文献複写申込(相互利用)がますます増加することが予想される。

なお、例年通り、三月末に蔵書点検、四月末に資料のくん蒸を実施した。

(5)マイクロ室業務

熊本大学附属図書館(北岡文庫)他一三文庫、九一五リールの作業用ネガフィルムを作製した。閲覧用ポジフィルムは、山口大学附属図書館(紫蘭文庫)等五二七リールを作製し、整理を行った。紙焼写真本は、六七〇冊の製本、装備を行った。

(二)参考室

日常業務として、参考質問の受付・回答に従事し、参考図書の充実と参考開架閲覧室の維持にあたった。

国文学の普及業務として、次のとおり公開講演会・展示を開催した。

●第24回公開講演会(6月7日、於当館)

「西鶴晩年の動向」檜谷昭彦氏(慶応義塾大学教授)、「和歌史の構想」島津忠夫(大阪大学教授)

●常設展示

第30回「狂歌」(1月13日～3月22日)

第31回「和書のさまざま」(4月21日～6月28日)

なお、昨夏の第8回夏期公開講演会の筆録集である『近世の日記・記録(国文学研究資料館講演集7)』を刊行し、大学図書館等への寄贈のほか、希望者にも配布している。

(整理閲覧部長)

委員会日誌

昭和六十一年

5月12日　国際日本文学研究集会委員会(第一回)

5月13日　国文学文献資料収集計画委員会(第一回)

5月20日　国文学文献資料調査員会議(総会)

7月4日　共同研究委員会(第一回)

7月22日　文献目録委員会(第一回)

運営協議員会議の開催について

本年度第一回運営協議員会議が五月十四日(水)に当館中会議室において小山議長ほか十六名の出席を得て開催され、議事は、教官人事について及び管理運営の概況について協議が行われた。

外国人研究員

ウエダ・マコト

カナダ　スタンフォード大学教授

研究題目　日本文学における作品終結の論理

期間　昭和61年9月15日～昭和62年3月14日

国際交流基金文化人短期招へい者

ジャン＝ジャック・オリガス

フランス　国立東洋言語文化研究所教授

専攻　日本文学・語学

期間　昭和61年11月10日～昭和61年11月24日

大学院教育協力受託学生

田渕句美子

所属　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻

研究題目　中世和歌

期間　昭和61年4月1日～昭和62年3月31日

佐藤マサ子

所属　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻

研究題目　カール・フローレンツの伝記及び日本研究の研究史上に於ける意義

期間　昭和61年4月1日～昭和62年3月31日

内地研究員

高橋　啓

現職　鳴門教育大学学校教育学部助教授

研究題目　近世文書の基礎的研究

期間　昭和61年9月1日～昭和62年2月28日(6カ月)

文書館業務に関する職員の研修

青山英幸

現職　北海道立文書館資料課公文書主任

研修内容　文書館学及び文書館資料の取り扱い
期間　昭和61年6月30日～昭和61年7月12日

海外出張等

外国出張
安永尚志
渡航先　インドネシア共和国
目的　第1回東南アジア地域インフォーマティックス企画会議
期間　昭和61年6月15日～昭和61年6月20日

堀　浩一
渡航先　西ドイツ
目的　第11回計算言語学国際会議出席及び研究発表
期間　昭和61年8月23日～昭和61年8月29日

研修旅行

安藤正人
渡航先　英国
目的　ロンドン大学図書館・文書館　情報学科文書館学修士課程に留学
期間　昭和61年6月26日～昭和62年7月16日

堀　浩一
渡航先　西ドイツ・スイス
目的　学習機構の基礎的研究に関する調査及び研究討論
期間　昭和61年8月30日～昭和61年9月9日

人事異動（昭和61年4月～昭和61年8月）

（転入）昭和61年4月1日付
文部事務官（庶務課長）國井和朗（緯度観測所より）
（転出）昭和61年4月1日付
文部事務官（庶務課長）林　昇（一橋大学へ）
昭和61年5月1日付
文部教官（研究情報部助手）松岡心平（東京大学へ）
（昇任）昭和61年6月1日付
文部教官（研究情報部教授）安永尚志（研究情報部助教授より）
文部教官（研究情報部助教授）堀浩一（研究情報部助手より）
（客員教授）昭和61年4月1日～昭和62年3月31日
文献資料部　雲英末雄（早稲田大学教授）
（併任）昭和61年4月1日付
文献資料部長　長谷川　強
昭和61年4月1日～昭和61年9月30日
文部教官（文献資料部助教授）菊池　仁（山形大学人文学部助教授）

データベースサービス準備室の発足について

当館がかねてその目標の一つとして来た国文学に関するデータベースのオンラインサービスが、いよいよ昭和六十二年度から実施されることとなり、本年一月、館内にデータベースサービス準備室が編成され、準備作業に当ることになった。

このことは当館の創設当初からすでに構想されていたことであって、昭和五十二年に当館が開館し、収集した国文学関係マイクロ資料の閲覧サービスを開始した際にも、最初からコンピュータによる目録作成を行い、各年度の冊子体目録を作成配布するとともに、目録データの蓄積とそのデータベース化を図って来た。以来今日までほぼ十年の間に、八万件近いマイクロ資料目録データが蓄積され、一方技術の目覚しい進歩とともに独自のシステム開発を進め、昨年四月からマイクロ資料目録データベースのオンライン検索実証実験（館報25号所載）を開始するまでに至った。

ただ、検索システムが作動することが実験的に確かめられても、実際にサービスするとなれば、データの質の維持、使い勝手をよくする問題、ユーザとの対応、料金の問題、規程類の整備、サービス体制や要員の配置など、きわめて広範囲に及ぶ新たな検討課題を処理せねばならない。そこで準備室では、当初はデータベースのオンラインサービスとしてはやや限定されたものであっても着実に実施できるものを目指して、最も条件の整っているマイクロ資料目録データと、これに準ずる当館所蔵和古書目録データのオンラインサービスから開始することとし、準備作業のガイドラインを立案し、部長会議の了承を得て全館の協力のもとに諸課題の処理に当っている。

以上、目下検討中のことであるが、やがて成案を得て、年度内には周知をはかり来年度から利用が可能になるよう鋭意努力中である。

（準備室長　山中光一）

利用者へのお知らせ

◆『マイクロ資料目録』累積版について

このたび、閲覧室備え付け用として、『マイクロ資料目録』一九七六年（第一冊）から一九八五年（第九冊）までの九冊分の累積版（累積目録）が出来ました。『マイクロ資料目録』九冊分のデータ約七万七千件を、書名の五十音順に並べたものです。

なお、この目録は、書名目録のみで、索引等は付いていません。著者名・記載書名からの検索は、カウンター脇の端末機を使用してオンライン検索を行ってください。

◆『マイクロ資料目録』データベースのオンライン検索の試験的公開について

すでに館報第25号でご紹介しましたように、昨年四月から、『マイクロ資料目録』データベースのオンライン検索の試験的公開を始めました。現在、『マイクロ資料目録』の一九七六年（第一冊）から一九八五年（第九冊）まで約七万七千件のデータが累積されております。閲覧室カウンター脇の端末機で、書名または著者名から検索することができます。この試験的公開は、直接利用方式となっておりますので、利用者の方に、直接端末機を操作して検索していただくことになっています。詳しくは、カウンターで係員におたずねください。

◆当館の刊行物について

当館では、各部がそれぞれの目的に沿って事業を行うとともに、出版物を刊行しています。

各機関や利用者の方から、当館の出版物について、どこに聞いたらよいか、との問い合せがよくあります。また、刊行物を入手するにはどうしたらよいか、市販している刊行物は何か、個人に配付しているものはあるか、等々の問い合せが寄せられています。

そこで、当館の主な刊行物の一覧とその問い合せ先を掲げることにしました。（配列は五十音順、カッコ内は問い合せ先）

1　国際日本文学研究集会会議録（研究情報部情報室）
2　国文学研究資料館紀要（館報紀要委員会）至文堂より市販
3　国文学研究資料館共同研究報告（庶務課共同利用係）明治書院より市販
4　国文学研究資料館講演集（整理閲覧部参考室）
5　国文学研究資料館蔵逐次刊行物目録（整理閲覧部受入係）
6　国文学研究資料館蔵マイクロ資料目録（整理閲覧部受入係）笠間書院より市販
7　国文学研究資料館蔵和古書目録（整理閲覧部受入係）
8　国文学研究資料館特別展示目録（整理閲覧部参考室）
9　国文学研究資料館報（研究情報部情報室）
10　国文学研究資料館報告（整理閲覧部受入係）
11　国文学年鑑（研究情報部編集室）至文堂より市販
12　参考書誌叢刊（整理閲覧部参考室）
13　調査研究報告（文献資料部）

◆所蔵資料の展示について

当館では、所蔵古典籍資料の紹介と国文学の普及を目的として、一般公開の展示を継続して開催しています。

会場は二階の展示室で、開室時間は、閲覧室と同じで、九時三〇分～一六時三〇分です。毎月末日などの休室日も閲覧室と同じですが、他に、展示の入替え期間（各一週間程度）も休みとなります。

展示は、三ヶ月ごとに入れ替えの常設展示と、年一回二週間程度の特別展示とに分けられます。

常設展示は、毎年度を四期（四～六月、七～九月、十～十二月、一～三月）に分け、時代別やジャンルなどの各種テーマにより行います。展示解説を兼ねた展示書目リーフレットも用意しています。

特別展示は、例年秋に開催しており、常設展示には出展していない貴重資料や寄託資料をも用いて、より充実した内容で行います。この際には、特別展示目録を刊行して配布しています。

なお、展示予定等の詳細については、整理閲覧部参考室までお問い合せ下さい。

昭和六十一年度秋季学会開催一覧

情報室

国語国文学会連絡協議会に参加する学会の秋季大会予定は次のとおりである。学会掲出は五十音順。以下①事務局、②大会開催日、③会場。②③の記入のない学会は大会予定無しか、または大会期日未定。

解釈学会　①〒一七〇豊島区北大塚三―二九―二教育出版センター内

近代語学会　①〒一六〇新宿区北新宿三―一〇―一〇―五〇七

国語学会　①〒一〇一千代田区神田錦町三―一一武蔵野書院気付

古事記学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部日本文学第二研究室

古代文学会　①〒一六四中野区中野五―一九―一六―二〇五西條勉方

上代文学会　①〒一六〇新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学教育学部国語国文学研究室内

説話文学会　①〒一五四世田谷区駒沢一―二三―一駒沢大学文学部国文学研究室内②一二月六日③京都女子大学

全国大学国語国文学会　①〒一〇一千代田区猿楽町二―八―一三桜楓社気付②一一月一五～一七日③山梨英和短期大学

中古文学会　①〒一七一豊島区目白一―五―一学習院大学国語国文学研究室内②一〇月二五～二六日③松蔭女子学院大学

中世文学会　①〒一六〇新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学教育学部梶原研究室内②一〇月二五～二七日③宮城学院女子大学

日本演劇学会　①〒一六〇新宿区西早稲田一―六―一早稲田大学演劇博物館内②一〇月一八日③同志社大学田辺校舎

日本歌謡学会　①〒一五〇渋谷区東四―一〇―二八国学院大学文学部第七研究室内②一〇月一八～一九日③宮地嶽神社（福岡県）

日本近世文学会　①〒一五四世田谷区駒沢一―二三―一駒沢大学文学部富士昭雄研究室内②一一月二二～二三日③広島グリーンパレス

日本近代文学会　①〒一九二―〇三八王子市東中野七四二―一中央大学文学部国文学研究室②一〇月二五～二六日③明治大学

日本口承文芸学会　①〒一六〇新宿区西新宿八―四―五財団法人ラボ国際交流センター広報部気付②一〇月一八日③ラボ教育センター八階教室

日本文学協会　①〒一七〇豊島区南大塚二―一七―一〇②一一月二九～三〇日③日本大学文理学部

日本文学風土学会　①〒二一四川崎市多摩区東三田二―一―一専修大学文学部国文学研究室内②一一月二九日③専修大学神田校舎

日本文芸研究会　①〒九八〇仙台市川内東北大学文学部内②一一月八日③東北大学文学部大講義室

俳文学会　①〒六〇五京都市東山区東山七条京都女子大学文学部浜千代研究室内②一〇月二五～二七日③作陽音楽大学

表現学会　①〒四八〇―一一愛知県愛知郡長久手町愛知淑徳大学国文学科研究室内

仏教文学会　①〒一〇二千代田区三番町六番地二松学舎大学（東部）〒六〇〇京都市下京区七条大宮龍谷大学（西部）②一二月七日③大谷大学

万葉学会　①〒五六五吹田市千里山東三関西大学国文学研究室内

美夫君志会　①〒四六六名古屋市昭和区八事本町一〇一中京大学文学部国文学研究室内

和歌文学会　①〒一一三―九一文京区本郷郵便局私書箱第二八号②一〇月四～六日③山形大学

館報入手ご希望の方は

郵便番号、あて先、氏名を明記のうえ、郵送料（切手）を同封して当館情報室あてお申し込み下さい。

国文学研究資料館報　第二十七号
昭和六十一年九月発行
編集・発行者
国文学研究資料館
東京都品川区豊町一―一六―一〇
郵便番号一四二
電話（七八五）七一三一（代）
印刷所　株式会社　三興